

わが青春——ラルフ・ノイマンの回想

——ユダヤ人を救った人々(11)——

Erinnerungen von Ralph Neuman

平 山 令 二

要 旨

1926年にベルリンに生まれたユダヤ人ラルフ・ノイマンは、ナチス政権の反ユダヤ政策がエスカレートする時代に青少年時代を過ごし、ユダヤ人の強制移送が進むなか、母と姉のリタといっしょに潜行生活に入った。母はゲシュタポに逮捕されたが、ラルフと姉は、同じ潜行ユダヤ人、社会民主主義者、キリスト教徒の抵抗グループ、農民など多くの人々の支援を受け、一旦は逮捕されるという危難もあったが、偶然的要素と必然的要素のからみあうなかで無事に生き延びて終戦を迎えることができた。救済者たちは自らの生命の危険も冒して、ラルフに住居、食料、教育など様々な形で支援を行った。改めてユダヤ人救済のために勇気を奮い、知恵を尽くしたベルリン市民が数多くいたことを確認できるのである。

キーワード

ユダヤ人、潜行生活、救済者、反ナチスのキリスト教徒、「エミールおじさん」

「ユダヤ人を救った人々」という本シリーズであるが、今回も救われたユダヤ人の立場からの回想録の第3弾を紹介したい。これまでの2回の主人公は女性であったが、今回は男性であるラルフ・ノイマンの回想を取り上げる。

1. 迫害下の生活

私は1926年にベルリンのユダヤ人家庭の末っ子として生まれた。翌年、

父が結核で死亡した。幼い私も結核を罹患して病弱だったので、都会は不健康だと思った母は、私をベルリン郊外の養育施設に預けた。ヒトラー政権に多数のドイツ人が熱狂していた時代で、同級生はヒトラーユージェントに入り始めていた。ある日、母が施設にやってきて、ユダヤ人の私はもう施設には入れられない、と告げた。それは1938年の初めのことで、ナチスの反ユダヤ・プロパガンダの最盛期だった。同級生に別れを告げる暇もなく、そのまますぐに母に連れられてベルリンに戻った。

それまでユダヤ人であることが何を意味するのか、私にはわからなかった。しかし、迫害を恐れユダヤ人の多くが海外に脱出していた。ユダヤ人のエクソダスの頂点は、1938年と39年だった。家族が世界中に散らばる家もあって、私の家族も、長兄はパレスチナ、次兄は南アフリカ、姉はイタリアとばらばらになっていた。

私は近くの学校に通うようになった。最初の数週間はすべてうまくいって、近くの子どもたちといっしょに学校に通ったが、ある日、私がユダヤ人であることがわかり、級友たちは私をののしって、「学校にこれ以上通おうとするならなぐってやる」と脅した。校長は母に、私をユダヤ学校に通わせるよう勧告した。

それで遠くのユダヤ学校に通うようになった。遠くに通うのは大変だったが、そんなことはなんでもなかった。学校が素晴らしかったからだ。先生方は教育熱心だった。ただ、私にはユダヤ学校に通う準備ができていなかった。ヘブライ語がまるでできなかつたし、ユダヤの歴史、伝統、ユダヤ教についての知識もまったくなかつたからだ。しかし、ユダヤ学校ではだれもが私に忍耐強く接してくれたので、やがて勉強に追いつくことができるようになった。

私には同年輩の友人がいなかった。ユダヤ人であることがわかってから、近所の親は子どもに私と遊ぶことを禁止したからだ。ユダヤ学校にはベル

リン全市から子どもが通ってきていたが、近所には友人ができなかった。そのため、たいていひとりで過ごしたけれど、がっかりすることはなかった。与えられた境遇から最大限の利益を得ようとしていたからだ。

1938年11月9日の夜、いわゆる「水晶の夜」にナチスはすべてのユダヤ商店の窓ガラスを破壊し、略奪し、シナゴークに放火した。近くのシナゴークが火に包まれるのを私たちは見ていた。恐ろしい光景で、もっとひどいことがこれから始まる、という予感を抱かせるものだった。その後の6年半の生活は、生命の危険に直結する事件の連続となった。

ある日、私たちは近くの警察署に出頭し、写真をとられ、指紋もとられ、「ユダヤ人」Judeの頭文字Jが表紙についた身分証明書を交付された。さらに、男性は「イスラエル」、女性は「サラ」というミドルネームをつけられた。

迫害がエスカレートしていくさ中、信じられないことだが、兄のゲルハルトがパレスチナから戻ってきた。パレスチナで仕事を見つけようとしたのだが、うまくいかなかったのだ。それに、パレスチナの暮らしが兄には我慢できないものになっていた。兄はアラブ人とユダヤ人の衝突で死者が出た場面を目撃し、自分の生命の危険も感じたからだった。ドイツに帰国してから、兄は若い娘のいる女性と結婚した。悲劇的なことだが、兄はドイツに帰国したついでに数年後に命で償わなければならなかった。兄の家族は3人とも1942年12月14日、「東方へ」強制移送され、その地で殺害された。

1939年9月1日、ヒトラーの軍隊はポーランドに侵攻し、第2次世界大戦が始まった。家族3人でラジオに耳をすませている情景をありありと覚えている。「国境付近のドイツ市民に蛮行がふるわれたので、敵のポーランドを罰しなければならない」とラジオでは侵攻の理由を主張していた。南

アフリカにいた兄のフレートは、母と未成年の私に南アフリカへの移住が許可された、という証明書を送ってきたが、姉のリタはそこには含まれていなかった。それで母は3人でドイツに残ることに決めた。最悪の事態は終わり、ナチスとて何世代もドイツに暮らしてきたユダヤ人は容赦するはずだ、と母は考えていた。あとからわかったように、それはたんなる希望的観測にすぎなかったのだが。母がドイツの残る決断をしたもうひとつの理由は、移住すると私たちの唯一の収入源である年金を失ってしまうことだった。

ある日、ユダヤ人はラジオを聞いてはならない、という命令が伝えられ、ラジオを警察署に供出しなければならなくなった。すでに1935年のニュルンベルク法以降、ユダヤ人から次第にあらゆる権利が奪われていた。映画館、劇場、大部分のレストランに入ることはできなくなったし、公共交通機関や電話の利用も禁止された。電気製品、カメラ、宝飾品も供出しなければならなかった。禁止事項は数えきれないほどで、今ではその多くを忘れてしまっている。

私にとってのナチス政権による脅しの頂点は、1941年9月に黄色のダビデの星を渡されたことだ。星の真ん中にはJude「ユダヤ人」という黒い文字が印刷されていた。外出するときには、この星を左胸につけていなければならなかった。

私の学校では、教師不足のためにまともに学ぶことができなくなっていった。1941年初め、ユダヤ学校をやめた。こうしてあり余るほどの暇を手に入れることになった。母は半日だけ働き、姉のリタはケーブル工場で強制労働に従事させられていた。

のんびりしていた数週間も終わりを告げることになった。1941年秋、母はまだ残っていたユダヤ私立学校のひとつに私を送った。ハノーファーに近いところにある農業と造園の学校だった。ベルリンから鉄道で数時間の

ところだった。その学校は1893年に、ユダヤ人の若者を農民に教育するために設立された。当時、中央ヨーロッパで農業に従事していたユダヤ人は1.5パーセントしかいなかったのだが。

学校での授業は、教室での学習と畑や畜舎での実技にほぼ等分されていた。私は生徒のなかで最年少であり、身体も一番小さかった。他の生徒のように頑健でなかったので、実技についていくのは大変だった。

1942年6月30日、ゲシュタポが閉校を命じたため、よそからきていた生徒たちは、故郷に帰らなければならなくなった。悲しく不安に満ちた終わりだった。これから自分たちを一体なにが待ち受けているのか、わからなかったからだ。

ベルリンにもどると、母とリタはひと部屋だけの小さな住居に移っていた。ユダヤ人は狭い住居に住むように当局が命じていたからだ。翌年、私たちはさらに2回引っ越さなければならなかった。その間、母も電球工場で強制労働に従事させられることになった。私の方は、ヴァイセンゼーにあるユダヤ人墓地の造園作業に従事させられた。墓地は大きく、1880年以来埋葬地として使われていた。第1次世界大戦でドイツのために戦死したユダヤ人兵士の墓が敷地の多くを占めていた。しかし、そこでの仕事がなくなり、1942年秋、私は解雇された。墓地の維持に資金を出すユダヤ人の親族がいなくなったからだ。手入れの行き届いていた墓地は、見る見るうちに荒廃してしまった。

職業安定所は私に工場での仕事を割り当てた。母が働いている工場だった。工場は私たちの住んでいるティーアガルテン地区のなかにあり、住居から近かった。母と私は同じ勤務時間帯になり、工場へ行くのも帰るのもいっしょだった。いっしょに歩くあいだ、母と私は休みなく話をした。ゲシュタポの強制移送の命令が私たちに届く前に、戦争が終わるはずだ、という希望的観測についても話しあった。

すでに1942年から、いわゆる「移住」という名目でユダヤ人の多くが強制移送されていた。公式には、以前のチェコ領テレージエンシュタットにユダヤ人の町が作られ、そこに移住するという事になっていた。しかし、ユダヤ人は実際にはゲットーに送られ、大部分は絶滅収容所にゲットーから、あるいは直接移送されると聞いていた。私たちは、ベルリンから強制移送を命じられる最後のグループに属していた。

残った私たちの生活環境はますます劣悪化していた。食料の配給はますます少なくなり、冬の石炭も配給されなかった。仕方なく、亡くなった祖母の木製家具を解体して、薪として暖房に使った。こうして、なんとか1942年から43年にかけての厳寒の冬を生き延びることができた。

1943年2月、ベルリンのユダヤ共同体から恐れていた移住命令が送られてきた。荷物をまとめて集合場所に出頭するように、と書かれていた。これまで命令への対応策について話し合ったことはなかったものの、私たちは命令に従わないことに決めた。命令に従った知人たちの運命がどうなったかわかっていたので、逃げ道を探さない選択肢はなかった。姿をくらまし、潜行生活をしようと思った。しかし、言うは易し、行なうは難し、だった。具体的なプランがなかったからだ。私たちをつき動かしていたのは、恐れだけだった。

1943年2月17日、集合場所に出頭する期日の前の晩、トランクといくつかのカバンを手にもって、夜の闇にまぎれて住居を出た。こうして私たちは住むところのない逃亡者になった。

2. 潜行生活の開始

まず「人種間結婚」をしている夫婦を当てにした。片方だけがユダヤ人で、ユダヤ人ではないパートナーと暮らしているため、「特権的」ユダヤ人としての待遇を受けている知人夫婦である。

住居を出たのは厳寒の夜だった。トランクはとても重かった。玄関のベルを鳴らすと、出てきた知人夫婦はひどく驚いていた。ゲシュタポの捜索と思ったからだ。一晩だけの約束で私たちを泊めてくれた。横になったベッドでは南京虫に襲われ、眠れない夜を過ごした。次の夜も一晩だけの約束で他の知人のところに泊まった。夜明けに外に出たが、行き場が見つからなかった。

仕方なく、その晩は元の住居にもどることにした。ほんの数時間でも眠りたかったからだ。部屋のなかでは、物音ひとつ立てないようごく静かにしていた。誰にも見られないように明け方、また住居を出た。一日中、他の地区を歩きまわり、助けてくれる知人はいないかと、道行く人の顔をのぞいて歩いた。しかし、隠れ家を提供するという危険を犯す知人は誰もいなかった。夜はまた住居にもどって眠った。こんなことを一週間ばかり繰り返した。だが、そのような住むところのない状態も終わりを告げることになった。

ある日、私はユダヤ人、レオ・フライネスに出会った。レオはビジネスマンで、陽気で、人生について現実主義的な考えをもっていた。すでに潜行生活に入っていた彼から、家具つきの空き部屋の家主を紹介された。2、3か月分の家賃で、空き部屋を貸してくれる、という話だった。母は同意し、ようやく身を隠す住居を手に入れ、私たちは心から安堵した。生活用品などが必要だったので、元の住居に取りにもどることにした。必要な生活用品を手にして、すぐに住居を出た。今回は私もリタも誰かに見張られているような感じがしたので、母に元の住居に行くのはもうやめにしよう、と言った。母も同意した。

ある晩、リタと私は用事のために外出した。かなり遅くなって帰宅したら、驚いたことに母がいなかった。「必要なものを取りに元の住居に出かける」という母の書き置きがあった。母はもどって来ず、私たちは様子を見

に元の住居に行ってみたが、母はいなかった。翌朝、レオの隠れ家に行った。レオは、私たちが考えたように、母が元の住居で逮捕されたのだろう、と言った。そして、私たちに今の隠れ家に絶対にもどらないようにと忠告した。ゲシュタポが母に私たちの隠れ家を白状させるはずだからだ。私たちは身の回りのものを手に、急いで隠れ家を出た。

逃亡者をふたりとも引き受けてくれる人はいないだろう、という理由でリタと私は別々に行動することにした。リタは、長年の知り合いの非ユダヤ人のお針子のところに泊まることになった。レオは、前から潜行生活の準備をぬかりなくしていた。レオは、独身の女性労働者の身のまわりの世話をしていた。家賃と他の費用の支払いをして、調理など家事も担当していた。その代わりに、アレクサンダー広場の近くにあるその女性の小さな住居でレオはソファーに眠らせてもらっていた。住居に他人は呼ばない、とレオは約束していた。しかし、私を助けるためにレオはその約束を破った。女性労働者は一日中仕事をしていたので、私はしばしばレオのところに行き、しばらくそこで過ごすことができた。

レオは唯一の支えだった。彼なしでは、生き延びることはできなかっただろう。私を住居で休ませることができないときには、レオは金と食べ物をくれ、勇気づけてくれた。レオは楽観的な考えをもっていて、気前もよかった。私より28歳年上で、父の世代に属していた。レオは暗い時代がくることを予想して、金などを蓄えていて、闇市の仕組みにも精通していた。彼のネットワークは驚くほど多彩だった。レオから、隠れ家を提供してくれるという見知らぬ男を紹介され、男の住居に行った。しかし、ドアに警察の告示が張られていて、その男は闇取引の罪で警察に逮捕された、と書かれていた。

行き場がなくなってしまったため、私は通りを歩きまわり、駅のトイレで寝たが、ひどくみじめな思いだった。レオの住居には休日は女性労働者

がいるので、平日にレオのところに行き、死ぬほど疲れていた身体をすぐに休ませた。レオは食べさせてくれ、金もくれた。レオからリタの話を聞いた。リタはある夫婦に家政婦として雇われている、とのことだった。その夫婦はリタがユダヤ人であることを知りながら、隠れ家を提供してくれたのだ。

軍の検問があっても、私は16歳にしては身体が小さくて、金髪の典型的なドイツ少年に見えたので、問題なかった。ただ、あるとき電車で検問にひっかかり、身分証明書の提示を求められた。幸いなことに、Jの文字のない以前の労働証明書を持参していたので、危ない場面を逃れることができた。

3. 農場の暮らし

いつだったか忘れたが、私たちが想像したように、母が元の住居で逮捕されたという情報が伝えられた。母は「東方へ」移送され、戦後知ったことだが、1943年6月26日にベルリンのユダヤ病院でなくなり、ヴァイセンゼーの墓地に埋葬された。母は58歳だった。レオは私の隠れ家を探していたが、なかなかうまくいかずに、3週間経ってしまった。このままでやっていけるのか、不安になった頃、レオのところに出かけると、レオが上気した顔で「隠れ家が見つかった」と言った。隠れ家は、ベルリン郊外の田園地帯のメルヒョウ村にあった。働き手を必要としていたフライシャーという農民のところで働くことになった。レオは闇でフライシャーのところから肉を買っていたのだ。

すぐに私はフライシャー家に向かった。手入れの行き届いた古い住宅だった。働き手を必要としていたフライシャーはおおいによるこんだが、近所の人が私のことをどう思うかに配慮して、障害で兵役を免除されていることにした。それらしく見せるために、歩くときには足をひきずるように

した。また、私はフライシャーの甥ということになった。

翌日、フライシャーは私を近くの牧場に連れて行った。雌牛と羊が穏やかに草を食んでいた。フライシャーは作業のやり方を教えてくれた。家畜の世話は楽しかった。田舎暮らしは、歓迎すべき変化だった。もう都会をあてどなくさまよう必要はなくなった。フライシャーは、1939年に兵士として体験したドイツ兵のポーランド市民への蛮行を語った。この体験のため彼は精神に異常をきたし、軍隊を離れることになった。

村人と接触する機会はほとんどなかった。ただフライシャーの友人の村の警察官だけは例外だった。ミルクをもらいによくやって来て、私ともおしゃべりした。私がフライシャーの甥で農業を学んでいた、という作り話を警察官は信じていた。私がユダヤ農業学校で学んだ知識は、作り話の信憑性を高めるうえでとても役立った。

晩夏のある日、牧場で搾乳をしていたとき、遠くから誰かがやってくる姿が見えた。フライシャーではなかった。姉のリタだった。私たちは大喜びした。リタは一気に次のような話をした。

リタを雇ってくれた夫婦は、とても大事にしてくれた。しかし、不幸なことに、妻が親しい女友達に、リタがユダヤ人であることを洩らしてしまった。女友達も秘密を守ることができず、ナチスのシンバがこの話を聞きつけて警察に通報し、リタは逮捕された。リタは警察署の上の階にある部屋に監禁されたが、ひと気がなくなったとき、窓から出て管を伝わって地面に降りて、逃亡した。密かに列車に乗り込みベルリンにもどり、レオに私の居場所を聞いて、やってきたというわけだ。フライシャー家の人々は、数日ならばリタもいてもよい、と言ってくれた。数日後、隠れ家の当てもないのにリタがベルリンにもどって行くのを見て、私は悲しかった。けれども、リタはベルリンでキリスト教徒のサークルと接触し、隠れ家を確保することができた。

ある日、フライシャーがベルリンから中年男を連れてもどってきた。その男はユダヤ人で、フライシャーがしばらくかくまうことにしたのだった。男は弁護士だったが、ナチスの迫害のために精神に異常をきたしていた。フライシャーの友人の警察官がいつものようにミルクを取りにきたとき、外にいた男性は警察官を見てパニックにおちいり、「私は哀れなユダヤ人です。どうか見逃してください！」と警察官に向かって叫んだ。フライシャーはあわてて男の腕をつかみ家のなかに連れていった。警察官が帰ってから、フライシャーは私に、男をベルリンに連れもどすつもりだ、と言った。警察官は友人なので密告はしないだろう、とつけ加えた。しかし、自分にも嫌疑が及ぶだろうと考え、私は翌日出ていくことにした。フライシャー家の人々は、「残りなさい」と言ってくれたが、残ることはフライシャー家にとっても私にとっても非常に危険だ、と私は答え、一家も同意した。こうして、荷造りをしてベルリンに向かった。

4. 再度のベルリン潜行生活

ベルリンの状況は以前のように希望のないものではなくなっていた。リタの人脈ですぐに隠れ家が見つかった。レオも非ユダヤ人の友人のところに安全な隠れ家を見つけてくれた。その友人は夜間勤務だったので、私は彼のベッドで自由に眠ることができた。レオは食べ物と金を調達してくれた。当時、ナチス政府は怪しい隣人の密告を奨励していたので、私はたいてい家にいて、暗くなってから出かけることにした。農家ででの忙しい作業の日々から、何もしないで部屋にいることになったので、孤独で落ち着いたかない気分だった。

しかし、反動が突然やってきた。数週間その家にいたあと、家主の男は私に「出て行ってほしい」と告げた。なぜかわからないままに、私は家を出た。また、通りを歩きまわり、駅のトイレで寝る暮らしにもどってしま

った。

幾晩か過ごしたあと、リタの知人が救ってくれた。リタが掃除婦として働いていたヴェントラント家のことである。父親のヴァルターは牧師で、妻のアグネスとふたりの娘はユダヤ人をかくまうキリスト教徒のグループに属していた。アグネスと娘たちは、ナチスに抵抗する告白教会の一員だった。

ヴェントラント家はよるこんで私を受け入れてくれた。生命の危険を冒しても、かくまってくれる人たちだった。ただ、ヴァルターを危険にさらさないように、アグネスは、私がユダヤ人であることを内緒にしていた。ヴァルターには、私は爆撃で両親を亡くした被災者、という話にしていた。

悲しいことに、ヴェントラント家はひとり息子を1942年の戦闘で亡くしていた。神学を学んでいた息子は父親のように牧師になるものと期待されていた。娘のルートも神学を学んでいた。もうひとりの娘アンゲリーカも牧師と結婚していた。ヴェントラント夫人は一家のキーパーソンで、あらゆる問題の責任をひとりで負っていた。陽気な人柄で、困難や危険に直面しても、冷静な判断力で解決策を見つけることができた。彼女は私の母親のような存在だった。

勤めに出るふりをして、私は朝、家を出て午後遅くに帰った。幸いなことに、日中過ごすことのできる知人も多かった。食糧配給券を私が持っていなかったので、ヴェントラント夫人は食べ物に分けてくれた。彼女は私のことを常に気かけ、励ましてくれた。本当の家族のようだった。

私が無教養な若者でなくなったのは、博士号のあるアバック夫人のおかげだった。彼女は毎週2回、個人授業をしてくれた。彼女は歴史学の博士号をもつ教師だったが、クエーカー教徒であり、ナチスに反対した社会民主主義者だったので解雇され、年金生活者になっていた。彼女もユダヤ人救援グループの一員だった。見せかけの仕事ということで出かけるのは、

たいていアウプ医師のところだった。彼はヴェントラント家の戦死した息子の友人の父親だった。アウプ医師が診療しているあいだ、書齋を使わせてもらった。暇が十分にあったので、書齋にある医学書を手当たり次第読んで、アウプ医師と昼食をとるときに、私はあらゆる医学的な質問を浴びせかけた。彼は微笑しながら、「戦争が終わったら医学を学ぶといい」と言った。

潜行生活に入ってから、リタと私は1、2回、父の墓のあるユダヤ人墓地に行った。潜行生活に入る前、母と私たちは金や証明書などを金属の箱に入れ墓に埋めておいた。しかし、墓に行くことは危険だった。潜行ユダヤ人を見つけるため、ゲシュタポが見張っている可能性があったからだ。ゲシュタポはいわゆる「引っかけ屋」を使っていた。ゲシュタポのスパイをしているユダヤ人や「混血児」のことである。潜行ユダヤ人を発見して逮捕することで、自分が強制移送されるのを免れていたのだった。

1944年夏、リタと私は埋めていた箱から金を取り出すため墓地に行くことにした。墓地に入る前に慎重にあたりをうかがったが、墓地の管理人以外にひと気はなかった。無事に金を取り出してもどろうとするとき、空襲で破壊された墓石がいくつかあるのが見えた。もっと驚いたことに、何百枚もの食糧配給券がそこに散らばっていた。肉、パン、乳製品などの色とりどりの配給券で、本物としか見えなかった。金の脈を発見したような気分です、興奮して配給券をかき集めた。明らかに、ドイツの食糧配給体制を混乱させるため、連合軍機が贋の配給券をばらまいたのだ。

配給券を持ち帰り、ヴェントラント夫人と相談して、用心して他の地区で配給券を使うことにした。それも一度につきわずかな枚数しか使わないようにした。こうして食卓はにわかに豊かになり、事情を知らない牧師は不審に思って、夫人に理由を尋ねたりしていた。

1944年の晩夏、リタとアベック夫人は、リタの存在を合法化するという

大胆な計画を立てた。そのためには、リタが非ユダヤ人であるという証明書が必要だった。いくつかの町では住民証明書を保管していた市役所が空襲で破壊されたので、その町の住民であると言い張るチャンスだった。アベック夫人は適当と思える町を探し出し、リタとふたりで勇気を奮って仮設市役所に出かけ、リタに偽名と偽の住所を言わせた。アベック夫人は、リタは姪で、空襲のため焼け出され証明書をすべて紛失してしまった、と述べ立てた。すぐにリタに身分証明書が与えられ、食糧配給券をもらい、宿泊先も手配された。また数日後に公共職業安定所で仕事もあっせんしてもらえることになった。大成功だった。

ノルマンジー半島に連合軍が上陸してから数週間後には、ドイツが敗北することは明白になった。連合軍はパリを解放し、ロシア軍はポーランド東部に到達した。戦争の終わりが見えてきたことで、私たちは安堵した。私はヴェントラント家の知人のところで臨時雇いの仕事をして、勇気ある人たちと知り合いになった。グリューバー牧師もそのひとりだった。彼はキリスト教徒の抵抗運動に参加し、1940年から2年半、強制収容所に入れられていた。なお、グリューバー牧師は1961年のアイヒマン裁判で、検察側の重要証人のひとりとなり、証言の際に私とリタの体験も引用していた。この事実はあとから人に教えてもらった。「助けが必要なときには、いつでも当てにしていよいよ」と言ってくれたベルヒャウ牧師は、1944年6月22日のヒトラー暗殺計画の死刑囚たちの教誨牧師だった。

リタは「アーリア人」としての自由を満喫して、仕事をするなかで様々な人間と知り合いになった。なかには高位のナチス黨員もいた。リタはその男に私の身分証明書を作らせる、という計画を立てた。ある晩、リタと私は男の事務所に出かけた。建物の入口の案内には、突撃隊のグループの部屋番号が記載されていた。部屋のなかには巨大なデスクがあり、男がうしろに座っていた。部屋にはナチスの様々な旗が飾られ、壁には褐色の制

服の突撃隊員の写真がいくつも貼られていたが、もっとも大きなものは様々なポーズをとるヒトラーの写真だった。場違いなナチスの聖地に来てしまったと私は感じ、リタが正気を失ってしまったのではないかとさえ疑った。ところが、男は私の身分証明書を作るのを手伝う、と明言し、名前は本名にするが、出生地はダンツィヒにする、と言った。その時点でダンツィヒに問い合わせることができなくなっていたからだ。さらに、証明書には私が下級の突撃隊員であり、兵役を免除されている、と記載することにした。男は最後に正式のスタンプを押してくれ、証明書は完成した。

5. 逮捕と逃亡

1945年に入ると、戦場はもっぱらドイツの領土に限られてきた。1945年2月半ば、グリューパー牧師夫人の頼みで、私は教会関係者である彼女の姪の重い荷物を駅まで運んだ。彼女の荷物を列車のなかに運び入れたとき、軍の検問が行なわれ、身分証明書の提示を求められた。私が突撃隊の証明書を提示すると、検問官は「突撃隊の一員であることは、兵役を免除される理由にはならない」と言って、私は逮捕され、詰め所に連れて行かれた。私は恐ろしい不安にかられ、一瞬逃亡も考えた。

詰め所では士官が私にどこで働いているか、尋問した。私がオスラム地区の労働証明書を示すと、「電話で確認する」と言って士官は出て行った。士官はもどって来るなり、「お前は2年前に逃亡したお尋ね者のユダヤ人だ」と決めつけた。万事休すだった。それからゲシュタポの支部に車で連行され、身体検査をされ、どんな手段で突撃隊の証明書を手に入れたのか尋問された。殴られて、私はリタのことを除いて真実を話したが、ゲシュタポは「突撃隊員がユダヤ人に証明書を出すはずがない」と相手にしなかった。

その後、監獄として使われている地下室に連れて行かれた。囚人で一杯

なっていて、身体を伸ばす隙もないほどだった。囚人はほとんど話す気力もないようだった。どのくらい監獄にいたのかわらなかったが、おそらく1日か2日だろう。私は上の階の事務室に連れて行かれた、部屋にはリタとヴェントラント牧師夫人がいた。リタは私の惨めな姿を見ると、悲鳴をあげた。リタだけは無事であってほしい、と願っていたのだが、リタは私を助けるために、周囲の反対を押し切り、牧師夫人につき添ってもらいゲシュタポに出頭することを選んだ。リタのしたことは自殺行為だが、その時は戦争の最終段階であり、生き残るチャンスが前よりあったのも事実だ。

尋問官は、リタと私を東に移送するため、まず集合場所に連行する、と告げた。これはナンセンスだった。ドイツの東部はほとんどロシア軍に占領されていたからだ。尋問官は、話している間に、私の腕が腫れているのに気づいた。尋問の際に虐待されたせいで、下膊の傷が原因で敗血症になっていたのだ。彼は、集合場所には病院があるから、そこで傷の手当てをすることになる、と告げた。

ヴェントラント牧師夫人は、ベルリンの再教育施設に3週間収監されることになったが、病気になったので、娘のルートが代わりに収監された。ただ、ルートも3日間収監されただけだった。待遇は良かったそうだ。終戦が近くなっていたので、ゲシュタポもヴェントラント家の処罰に関心を持つゆとりがなくなっていたのである。

私は、ゲシュタポの監視下にあるユダヤ病院にまず入れられた。そこから監獄の病院に移送された。リタは、集合場所に指定された隣りの建物に移送された。私は治療薬を処方された。ベッドで身体を休め、天国にいるような気分だった。強制収容所に移送される予定だったのに、ナチス当局は私を健康にしてから移送しようとした。まったくのナンセンスだが、ユダヤ人を人道的に扱っているという外見を世界に見せようという、恐ろし

いほどのナチスの嘘であった。また、強制移送に同意するという署名をユダヤ人に求めるのもナンセンスだった。「移住」にあたり全財産をドイツ国家に譲渡する、という内容の同意書である。ドイツ的徹底性を象徴するような文書である。

その後、幸いなことに私はリタのいる建物に移された。それから2、3週間そこにおいて、強制移送の日程が知らされた。1945年3月の強制移送予定日の2日前の晩、建物の近くに爆撃があり、窓と窓枠が破壊された。私たちは地下室に避難していた。空襲警報が解除され、自分の寝場所にもどってから、ドアや窓がひどく破壊されているのを見て、ここから逃亡できそうだと、思った。

翌日の午後、私たちは先に述べた同意書に署名させられた。強制移送は次の日の予定だった。時間はなかった。私たちの寝場所の上の階には、監視兵の寝室があった。その晩、空襲警報が鳴ったとき、リタと私は地下室に向かわずに階段をかけ上り、手近の部屋に入った。その部屋にはベッドがたくさん並んでいたが、誰もいなかった。やがて、各部屋のドアを開けて内部を確認する音が聞こえ、私たちの部屋のドアも開けられたが、ベッドの下に隠れていたので、気づかれなかった。その後、とても丈夫そうな洗濯物干し用ロープが室内にあるのに気づいた。ロープを窓際の大きな机にくくりつけ、投げ下ろした。地面には届かなかったが、一か八か伝って降りることにした。私がまず降り、続いてびくびくしながらリタが降りた。通常、建物の前には空襲時でも監視兵がいるのだが、前の晩の空襲がとても激しいものだったので、誰もいなかったのが幸いした。

地面に降り立ってから、ペルヒャウ牧師が数か月前に「困ったことがあったら、助けてあげる」と言ってくれたことを思い出し、2時間かけてペルヒャウ牧師の家に行った。彼は私たちを歓迎してくれ、ロープを伝って降りる際に傷ついた私たちの手に気づくと、治療のため抵抗運動の仲間の

ザイツ医師を呼んでくれた。

ベルヒャウ牧師のところの数週間いると、近所の人の不審の眼を浴びるようになったので、ザイツ医師は新たな隠れ家を手配してくれた。さらにザイツ医師は他の抵抗運動のグループも紹介してくれた。そのグループは「エミールおじさん」という名前で、中心人物のひとは女性作家のルート・アンドレアス＝フリードリヒだった。

新しい隠れ家にいるとき、私たちはそのグループの政治活動に加わった。ナチス政権は、進攻する連合軍に死を賭して抵抗しよう全国民に呼びかけていた。「エミールおじさん」のグループは、「Nein」という大きな文字を駅や建物に書くことで反対の意思表示をしようとしていた。見つければ射殺される危険きわまりない行動だった。

終戦間近、私はザイツ医師といっしょに郊外に隠れていたが、リタは抵抗運動のメンバーとベルリン中心部に近い場所にいた。ある日、ロシア軍の戦車の轟音が近づいてきて、ロシア兵が私たちのいる建物を包囲し、侵入してきた。兵士たちは私たちを見つけると、士官のところに行進した。「自分はユダヤ人だ」と私は士官に弁明した。士官は兵士たちになにかロシア語で命令し、兵士たちは私の腕を取り外へ連れて行った。私は、ユダヤ人であることが信じてもらえず、銃殺されるのではないかと恐れた。しかし、ロシア兵たちが私を連れて行ったのは、野戦食堂だった。そこで、これまで見たことのないような巨大な黒パンとスープを与えられた。素晴らしい味だった。その日遅くなってからようやく、私は2年半にも及ぶ潜伏生活が終わったという実感を持つことができた。

6. 戦後のラルフ・ノイマン

ラルフ・ノイマンは、戦後もドイツにとどまろうとしたが、リタがアメリカ兵と結婚して移住して呼び寄せてくれたのと、アメリカ軍とソ連軍の

対立でベルリンの情勢が不穏なものになったことで、ドイツ人の恋人といっしょにアメリカに移住した。その後、エンジニアの仕事に就き、いくつかの会社で働き、アメリカ各地に移り住んだ。その間も、潜行生活のときに助けてくれたベルリンの人たちとは連絡を取り続けた。彼がドイツに一時的に帰国したのは、アメリカに移住してから25年後のことだった。

ラルフ・ノイマンと姉のリタは、なぜナチス支配下のベルリンで潜行生活を送り、生き延びることができたのだろうか。潜行生活をして生き延びたユダヤ人のすべてに当てはまることだろうが、そこには偶然と必然の要素が複雑に入り交じりあっている。

まず、彼と姉が生き延びることができた最大の理由は、彼らが強制収容所に入れられるために呼び出される順番が遅かったことである。早くから呼び出されていたら、訳もわからないままに呼び出しに応じて、強制収容所に移送され、殺害された可能性が大きかった。ところが、順番が遅かったために、「東方に移住する」という建て前のもとで移送された人々がどのような運命をたどったのか、噂が十分に広がっていたので、呼び出しを受けたときには、なにがなんでも逃亡するという覚悟ができていた。この点、呼び出しの順番が遅かったのは、なによりも大きい幸運な偶然であった。

もうひとつの幸運な偶然は、ユダヤ人のレオと知り合ったことである。レオは、どんな逆境でも生き抜く才知と楽観性をもったユダヤ人である。「ユダヤ人を救った人々」という本シリーズでも、このように生き延びる本能的な才知をもったユダヤ人に救われた潜行ユダヤ人の体験記をいくつか紹介した。八方塞がりのような状況でも、あきらめずに前を向く意志と才知を持っているこのようなユダヤ人がいたことは驚きであるが、そのようなユダヤ人には他のユダヤ人を助けることなど朝飯前だった、と思われるほどである。

他方、必然と思われるのは、姉のリタの関係でヴェントラント牧師一家と知り合い、彼らからキリスト教徒の反ナチス抵抗運動グループのネットワークとつながりを持ったことである。このような大きなつながりによりラルフと姉が生き延びる道が大きく広がったのである。そのなかで、有名な抵抗運動グループ「エミールおじさん」にも助けられることになる。

このような偶然と必然の織り成す状況のなかで、ラルフと姉は生き延びてナチス政権の終焉に立ち会うことになった。それにしても印象づけられるのは、ラルフの回想録に出てくる救済者の数の多さである。直接、間接の救済者、さらに救済行為の長い、短い救済者、宿の提供者、食糧の提供者、さらには教育の提供者、など提供する内容は異なっているものの、生命・身体の危険を冒して潜行生活をするユダヤ人を救おうとした良心と気概のあるベルリン市民がなんと多かったことであろうか。改めて、名もない市民の持つ勇気と人道的行為の可能性に目を開かされる思いがするものである。

テキスト

Ralph Neuman: Erinnerungen an meine Jugendjahre in Deutschland 1926-1946,
Gedenkstätte Deutscher Widerstand.